

Nami-Aru? / Internet

「Friends Through Surfing」

文：ジョージ・カックル

「サーフィンは人を自由にする」、「サーフィンはリラックスした時間を運んでくれる」などと、人はよくそんなふういうけど、もうひとついいことは、友だちが増えるってことだ。昔、宮崎へ行ったときも、地元の友人にサーファーが集まる店に連れていってもらって、いろんな人といろんな話をした。いつも会っていなくてもいいんだ。もう二度と会わないかもしれないけど、サーフィンを通していい話ができる。もう巡り会えないかもしれない、いい波みたいなものだ。

サーファーの友だちは、海のなかでつくろうとすると時間がかかるけれど、陸で会えば結構、話しが合うものだ。アメリカに十年以上住んでいた頃も、海の上で挨拶するだけで名前も知らない人がいっぱいいた。毎朝乗る通勤電車のなかで顔を合わせる人みたいだ。なんかのきっかけがあると、友だちになるんだけどね。日本からアメリカに引っ越したとき、誰もローカルは知らなかったんだけど、俺には海で喧嘩して怒鳴りあったことがきっかけで、友だちになった男がいる。喧嘩したことで、すでに会話ははじまっているからね。アメリカ人はお互い言いたいことを言えば、すっきりして後にひかないから余計かもしれない。もしそこで喧嘩をしなかったら、次に会っても何もない。そいつはニーボーダーだったから海の上では小さく見えたんだけど、海からあがったら予想以上にでかい奴で、殴り合いにならなくて良かったと、ホッとしたもんだ。そいつとはそれから言葉を交わすようになったんだ。

それから、こんなこともあった。ポイント・ブレイクの海で俺ともうひとりのサーファーしかいなかったとき。代わる代わる波に乗ればいいのに、我れ先に乗ろうとするもんだから、どんどん沖に行って、とうとうお互いほとんど乗れない状態にまで沖に行ってしまった。バカだよ。そのサーファーとはその後、何年かして同じポイントで海を見ているときにばったり会ったんだ。そのポイントには何十人ものサーファーが波待ちをしていた。それを見て俺たちは目を合わせて笑ったよ。「お互いバカだったね、すごく良い波だったんだから、順番に乗れば良かったのにな」ってね。

カリフォルニアの町はずれの海岸へ2台の車で行ったことがあった。そこに日本人の男の子が顔を出した。何でそんなところにいるのかと思ったら、サーフィンができる場所だからって日本からアメリカの飲食店に仕事で派遣されたんだけど、実際にはサーフ・ポイントには1時間もかかるようなところで働かされていたんだ。そんな話を聞きつつ、俺たちはすぐ友だちになって、そいつは俺のサンフランシスコの家の居候になったよ。もう15～16年前

のことなんだけど、つい最近、友だちのライブハウスに行ったら、おまえのサンフランシスコの居候が遊びにきたとか言われた。海では彼の友だちにばったり会ったりもする。

昔、マウイ島のラハイナの港の真ん前にあるホテルに泊まったとき、目の前のポイントに入ったんだけど、そこには金髪の白人ひとりしか入っていなかった。ハワイだったし、波も良かったし、俺たちはいい気分で話しはじめたんだ。夕方から陽が暮れるまで、サーフィンしながら話していた。そのサーファーは、近くで画廊をはじめたから来てくれって言っていた。俺は通りすがっただけで、画廊のなかには入らなかった。でも、何年か経って雑誌を見ていたら、そいつがクリス・ラッセンだって気付いた。あのときはまだ無名だったけどね。今じゃ向こうは覚えていないかもしれないけど、サーフィンをしながらいい時間を過ごせたことはいい思い出だ。もっと仲良くなっていれば良かったのかもしれないけどね（笑い）。こんなふうに、いい話はいつも海を通して生まれるものだ。